

911.3
八
1

非諧古今抄

再撰貞享式
日之一

非
驚
女
包
鈇



卷之六
 書物後
 十註
 十註

此從德意志國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之
 一僧自其國之

德意志國之僧人

物序

蓮



圖類叙



卷之六

下

公家殿上の酒宴と云ふは士農工商の品を以て
いふことなれども此艶詞と云ふは侍者^{シフキキ}の
とあることなれども今此能楽の只用と云ふは
のきと云ふはんやまうと云ふは連式といふは
はて詠抄といふは今これに漢文の能楽
と云ふは貞享此元年正月にけけけと云ふ
きりこひと云ふは其式の大本あることな
はし論と云ふは中右の詠抄と云ふは連式
とのり、信談手話と云ふはこれに
なりて回子と云ふはこれに

古今抄

三

改綴下
思ふ事
クシテ

このうち左の所録と二冊とこのうち右の所録と一部
と母なるものにして題号は違ふものと云ふ事連歌と
しては、（一）此の連歌と連歌にぬらして
遠く古代の體格とたゞ近く今人の體格と
ひらちるべし能く古今の所をわらう
たゞしく一部の之地より初なる能く古今の
ことす千系一斬の和訓あれは先師の古との事
ふとては、（二）此の連歌の體格ありて、
連歌の兩式より古今の事とて、
和歌の式とて、（三）此の連歌の體格ありて、

公家殿上の洒具とて、（四）此の連歌の體格ありて、
いふこととて、（五）此の連歌の體格ありて、
とて、（六）此の連歌の體格ありて、
の事とて、（七）此の連歌の體格ありて、
は、（八）此の連歌の體格ありて、
とて、（九）此の連歌の體格ありて、
きり、（十）此の連歌の體格ありて、
論とて、（十一）此の連歌の體格ありて、
とて、（十二）此の連歌の體格ありて、
とて、（十三）此の連歌の體格ありて、

一 臣の私とりれさるるあはるる世國のいふ
たひて石さの鏡たるる井と談笑のた
たひあふるの林たじまるといひたれ
りて併諧のこふたふくたきん

享保己酉之月去祥日



享保十年
辰マテ三年
二年也

古今抄凡例

- 一 此抄ニ〇今按ト祖翁ノ用捨ナリ其下ニ新古ノ
遠目ヲ考ヘシ△再撰ト先師ノ監察トシテ△校
ト△蓮ニカ拾遺ナリ△以△今ノ相致ニ知ヘシ
- 一 此抄ニ愛評ト愛議ト明監ト△段ノ差別アル法ニ
支配ノ輕重アル座ト云ク一廿ト云ク百廿ト云ク
總テ△新古ノ決論ニ百慮一失ノ辞宜ト知ヘシ
- 一 此抄ノ省法ノ下ニ△家語ノ詞ヲ假テ實猛ノ三字ヲ
云△△制度ニ時代ノ變々ヲ云ク或ハ用ル其ノ自在

監察下ハ
目録ノ下

如是我聞トハ
法華經ハシメ
出テ結述ナリ
新向カ洞也

ニテ用オハ其人ノ不自在トハ今式ニ人ヲ^カ明セス^カハ
古凡ノ偏屈ヲ山明ニ下ナリ或ハ先師ノ再撰ノ下ニ^カ是
如^カ是トハ^カ經ノ知是^カ我聞ニ^カ減後ニ^カ再撰ノ^カ折言語ナリ
一 此抄ニ^カ證句ヲ^カ奉ルニ^カ系ヲ定テ^カ各乘ナキハ^カ總テ^カ祖翁
ノ^カ證句ナリ^カ系ヲ定メス^カハ^カ此^カ印ヲ^カ書テ^カ直ニ^カ送^カ書ナリ
多ク^カ先師ノ^カ證句ナリ^カ但シ^カ別人ハ^カ句下ニ^カ其^カ名アリ
一 此抄ニ^カ里園ノ^カ印ハ^カ總テ^カ文法ト^カ句格ナリ^カ然レ^カ文字
ノ^カ傍ニ^カ隔テ^カ自園ノ^カ印^カハ^カ或ハ^カ切字ノ^カ節目ト^カ知ヘ^カラ
或ハ^カ對語ノ^カ相^カ致ト^カ知^カク^カ或ハ^カ段ノ^カ要^カ文ト^カ知ヘ^カシ
一 此抄ニ^カ古式トハ^カ多ク^カ連^カ字ノ^カ兩式ヲ^カ指シ^カ古抄トハ^カ貞徳ノ

辭讓ハ
ハシメテ^カ律
義ノ^カ洞也

律^カ令ヨリ^カ埋木^カ噓^カ州ノ^カ類ト^カ一部ニ^カ埋木ノ^カ名ヲ^カ指
サ^カル^カ師^カ資ノ^カ辭讓ヲ^カ察^カス^カキナリ^カ或ハ^カ稀ニ^カ本式ト
云^カハ^カ今ノ^カ貞^カ古^カ式ノ^カ本^カ文ヲ^カ指^カテ^カナリ
一 此抄ニ^カ異名^カ異^カ躰トハ^カ或ハ^カ牡丹ヲ^カ涼^カ見^カ草トハ^カ異名
ナリ^カ牡丹^カ辭トハ^カ異^カ躰ナリ^カ或ハ^カ音訓ノ^カ差別トハ^カ自^カ雲
ヲ^カシ^カラ^カモト^カ云^カハ^カ名^カ異^カニ^カテ^カ躰^カ同^カシ^カ故^カニ^カ異^カ名^カ
下^カ云^カク^カ異^カ躰^カニ^カト^カ云^カハ^カ今^カ式ト^カ古抄^カノ^カ遠^カ用^カ干^カ尚^カ條
ノ^カ古^カ法^カ下^カニ^カ悉^カ知^カス^カヘ^カシ

漢ノ宋玉詩
俗人也名國
ト云所所シテ
詩ヲツケル
偏固ハカタ
ヨツメ

あり或とちて清されらるしありゆてモ時人
しむらひて口授めばはにたなれんかか再撰
の場とのらしておそわてはねあまると地是
於角のあやしらんやまうとく竹筏の中く
あんまを兔園の冊とにらくともおあめと地北
達とらんを欲さるの偏固あまると武路
の右行人の議してけ式とをらくともはとたは祥子
不とけ書とりん一巻一巻の家とともと訛語の
古はとらよあれと訛語の公式かかめとと千式
下はのち名とまらひい遠くとも書の内種とあり

近くとけ撰の形現とまりて訛語をけしは式の
論とらうとせはよ五倫の交とやうけ訓諫と
談笑の用ちりともとらくかめとくか地
しむらひとまらひい遠くとも書の内種とあり
のさ地とをらひと也 詳説 詳撰

寶永七 庚寅 十月十二日

鳥ハ日ト
同シナリ日ニ
三足ノカラス
アレハナリ
宝曆十年
辰マテカ
二年也

貞享式目録

大段ハ本式ノ目録ナリ
小段ハ再撰ノ附録ナリ

一 俳諧と誹諧と字論此事

一 他諧と諷諫の道ある事

一 六義我と今の和訓此事

一 冬段向し切字せる事ある事

附 心切の事 中切の事

附 挨拶切の事

一 切し之程の差ふある事

附 二字切の事 二字切の事

三 段切の事 二 段切の事

一 心切し多る事ある事

附 とゆるの事 不ゆるの事

大廻の事 去切切の事

一 押字と抱字此事

附 句讀切の事

無名切の事

一 二品のうふ此事

附 浮載の事

附 二字切のり

二字切のり

三段切のり

二段切のり

一 心切し多々各ある事

附 とゆりのり

とゆりのり

大廻のり

玄切のり

一 押字と抱字此事

附 句讀切のり

無名切のり

一 二品のうふ此事

附 浮裁のり

一 月花也事

一 指合と去嫌也事

一 意向也事

一 季節の跨るる物也事

附 二季之季 四季よりり物の事

夏之の二季へ之向去まてやめり

一 季とあると新とある物也事

一 各所之雜の發向也事

附 新、躰の事 四季格の事

訛誤の事

叙哉のり

一 入心のかのり此事

附 入心子のり

一 心子のり

らん心子のり

一 百韻ノ表八句此事

附 發句ノ由のり 服ノ籠子のり

才ノ手念波のり 可司司の轉のり

一 四折ノ曲節此事

附 転向ノ作のり

撰集ノ内秘のり

一 月花此事

一 指合ノ去嫌此事

一 意向此事

一 季ノ節の踏くる物此事

附 二季ノ季ノ四季ノりり物

る及ノ二季ノ向去まぐやのり

一 季とあるノ新とある物此事

一 各所ノ雜の發句此事

附 新躰のり 四季格のり

詠諧のり

- 一 四季の各類記事
- 一 他譜の殿各遺記事

惣合十九條

古今抄序同終

再撰真言寺

日之一

古今他譜序

芭蕉庵

此は我らの他譜を二子歳のじうしと名ありて
シラ周奉の比より諷諫しとれ溪穂の向と終末と
シラいふしれ史記とこれの活書とをなすべしとて

和漢の風雅の二をともとあれりまらるるに中心は
 の誹語と子と應安の新式とをとりて慶長
 の御年といふまらるるに拵合とまらるるに
 とくむるまらるるに世の公式とありて東漢と

周代
 春秋代
 漢代
 魏代
 晋代
 宋代
 齊代
 梁代
 陳代
 隋代
 唐代
 五代
 宋代
 元代
 明代
 清代

古今抄

上

聖典トハ
聖ハ石主人
ノリ典ハ
ノリ定規
ノリ

唐制ハ
子述キ
オニハヤ

張三太子ハ
ハハハハハ
者キ云振
ニ振キキ
ハメル古事
アレハヤリ

唐ノリキマシマシマシ遊々安々ノリ然州と
レキキビ一ノヤキヤ聖典の控もるをいれ
おとそくあんととりひはる年月事とくす
とそくとい和歌も即世持氏のといふんはるす
孔子の家訓も實政務政の在訓と稱し實極
あひもくあくとちおひわすし能得の事話
ちり張之本子四の書ははとへて世にの凡例と
志はんとあれい極く悪とてらとへまや實ヤ
と善ととくむくれいふは亦の實極とく
て用ゆりて七人の自在うて用いさるし人の

沖波の流
任海のふり
鏡川より

孔子の言ふところをあらわされし中ちの記述に
連なり此後とていひては此等の信言とあり
今此他等の記述とていふは子にのみをいひて
去らざるにのちいひてはたしなむるをいひ
仰る家ノ教^{キヤウ}禪^{ゼン}の二はあることとていふは
此より第一とて大和の風雅の^{モスウ}徳書の流に
て言はれざるをいふの遊楽とていふは古人の
詞にせよとて破らばとあれははと破らば
とて我の法事の^{テヤ}的語とてはとて連流の
むらと効もとて記さるるに此記述と破らば

聖典トハ
聖い聖人
ノリ典ハ
ノリ定規

唐制ハ
子道キ
キニハヤ

張ニホリ
十ハツ
者ヲ云
ニ取テ
ハメル
アレハヤリ

唐とていふは言ふは遊々たるなり
はとていふは言ふは聖典の記述とていふは
かとていふは言ふは聖典の記述とていふは
とていふは言ふは聖典の記述とていふは
孔子の家訓も實政務政の在訓と行い實
あひとていふは言ふは聖典の記述とていふは
ちり張之本の四の記述とていふは聖典の記述と
志はんとあれは言ふは聖典の記述とていふは
と善言とていふは言ふは聖典の記述とていふは
て用ゆるは聖人の自在とて用いざるは聖人の

曆曆十宗
辰三十一
三十一
如クハ日

七五...
公入あんと取捨一文字の私あく今や一程此
衆徑より近く一世の衆議と衆心遠く百世
の的也一はるもや天の冥合とやんまや
とまよと一部の授記...は式めあともく
は式の名ははるる命

貞享五年辰子孟春如喜日

再撰貞享式

○俳諧と誹諧と字論此事

むう...俳諧と誹諧とを和音の字論
あれと誹子史記の素隠し滑稽昔猶俳諧と
怪ちり文ありくははく此評林と誹諧の所
か...と我おの中じ...延表の御代此
古今集より誹諧の二字と別て和歌の二所
とあ...拾遺集も此二字と用ゆん
同名の俳諧ちりや俳と別名の誹諧ちりや

俳諧
イ
カ
ト
マ
ア
フ
カ
イ
誹
諧
ト
コ
ク
マ
ハ
ラ
ク
ア
フ
イ
サ
ナ
フ
ス
メ
ル
ト
ナ
フ
メ
シ
ム
ニ
ニ
シ
ヒ
ン
イ
サ
ナ
フ
ス
メ
ル
ト
ナ
フ

し副假名をなれいさるもきくぬてかききり
て誹諧ヒイカイくしよき事れいしりしは物の成文
をなれりしきさうしハキハおとすし解し九ふりり
しよ誹諧ヒイカイ二し誹諧ヒイカイ三し誹諧ヒイカイ四し誹諧ヒイカイ五し誹諧ヒイカイ
法輔の真後おししゆし宗祇の言まうと誹ハ
甫尾坊し誹ハ胡密坊とあれ誹諧と誹諧を
ふる各し誹諧の非比有るしとふるもなれし
より代くし誹の字と用いさうし非比坊しより
てなるとなるとふるれはけし對しし身撃を
ししはなれしとるの秘訣ケツししし誹諧はけし
しししししし

過當トウダウ
ししし

東卷云△再撰タビもるんけし誹をほくし人編の
誹字しけしし一家建まのま地しとふれし
編タビ世憤俗セフンソクとつるなをの書は過當とけし
て他のし身撃をまししとくし例し我身の
誹言らりしとさうししし論しり運まはし同
かきし誹諧の名あしと増減しし今の誹諧は
常用とさうしし同大異の故とさうししし
ふるくし誹諧の遊戯らりしときししし
誹諧の空し戯らりしとさうしししししししし

諷諫し諫めし情程有し楚詞の諷刺又ちや
 ちとさむしとあれせれと又倫の和と本
 君父の善とさしと婦弟の悪とさしと
 善と善とくし悪と悪とくし直言とくし直諫
 されいし時主人の横嫌とやとされと三
 たるとくしやとれとくしより悪王としと
 悪とくしとくしとのれ悪と善とくしと
 儒仰の二音一感動とくしと或と善とくし
 日しありと殷紂のときと悪王ととのれと
 悪とありと比干の腹とさしとくしと善人の肝

殷紂王
 比干
 比干
 比干

とくしとくしとくしと人向の善悪とくしと
 十言論照の光ぬとくしと六種震動とくし
 とありとくしとくしとくしとくしとくしと
 いぬと楚の子西と悪王の供とくしとくしと
 諫めより楚王の悪とくしとくしとくしと
 ちとくしと儒仰のま子と諫官の互義とくしと諷諫
 とくしと最上とくしとか子西とくしとくしとくしと
 儒家とくしと仰とくしと提學とくしと盗跖とくしとくしと
 うとくしとくしとくしとくしと善人とくしとくしとくしと
 親せるとくしとくしとくしとくしとくしとくしと

諷諫
 目録
 丑義
 イサメ
 法式
 五
 揚上
 一ト
 三
 望
 三
 大

楚王
 子西
 比干

迂遠ハ
下リナリ

説
イッカリ

わさねまの 詭譎の かくもして 五七此句法と言語の
ありいりて 例の 詭譎の ありて 公道とあり 例此
詭譎の ありて 公道とありて 一とありて 然るの 建る
不し 一とありて 世に 此 無議より ありる ありて

東老を云い 一語の 雲々文と 儒仙の ありて 迂遠と
詭譎 孫老の 人此 高舉と 詭譎 一と 詭譎と
世にの 隨一と ありて ありて 世にの ありて
ついで 下学と 建の 用と ありて 文章 此 虚の ありて
ありて 勸破と ありて ありて ありて ありて ありて
孫子の 虚説の ありて ありて ありて ありて 天道

の 夫と ありて ありて 人道の ありて ありて ありて
虚の ありて ありて ありて ありて ありて ありて
他説の ありて ありて ありて ありて ありて ありて

高舉あり

○六義我々今の和訓此事

詩を ありて ありて ありて ありて ありて ありて
我々 ありて ありて ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて ありて ありて
各目より ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ちるのん詩の所義此所法ありとせしむるは
 六美の後の和漢とに今のあはれをたす味
 古語もいふを六種（分）とせしむるはえあむし
 まことつらうとく毛詩の六美は言白れむされ
 ちのちの比真の之を名に訓とに似ては
 了あめ和之とありせし連音とひけしは後二篇
 の的あはれとせしや昔守此所法ありとせし
 推号と此所法とあり○今按とるは六種此
 差ふは凡所頌の之種とて世界の人の和と訓論
 園畦と哀楽ととありつらうとく王侯士民の心

とりてち比真の之緯とて眼界の景物と訓詁
 一論詔と文所實とあり力とてくも熟竹木の
 名とありとむらにち比しと人とけり時遊心遊水
 の凡所とてあはれ世世の優格とせしむるは
 い王を在れりあはれとて天下此法をていふは
 ちるのん一とせしは能諧の六義とて地利と人和
 二用とては各各名同とありありとて各々も用
 とありありとて向とて向とて向とて向とて
 六種とて各々の昔用と和訓のあやとありとせし
 されは能諧の新制ありとせしむるは和漢の字名

中ありて先と我々の愛護しるる所

風

訓義我ニ凡トハ詠諭ナリ多ニハ言ト訓スレト和歌ニ
ハ副歌ト訓スレト比興ノ三躰ニ分ハシモ詩曰凡者
多出於里巷歌謡之作男女相與詠歌各謂
其情周南召南親被文王之化ニ言倫為凡詩
之正經也然レハ其国其人ノ凡俗ノ善惡ヲ凡謡ニ
依副テ美惡ニ公レ故ニ凡化トモ註セシナリ○今按スルニ
凡化モ凡俗モ總テ詩歌ノ詠諫ニテ上所化曰凡
下所習曰俗トモ上ハ以凡化下下ハ以凡刺上トモ云ヘリ
何レモ時代ノ凡謡ニ録名代ニ葛蒲ノ謡ヲ作りテ

雅

其代ノ俗樂ヲ刺レ類ナリ○猶按スルニ我家ノ訓
美ニ凡諭ニ字ノ意ヲ運ヒテ諭言凡訓スキヤ
然ラハ俳諧ノ宗ト成セ凡詠諫ノ和モ叶フヘンカ
去レ凡名ノ大騷トハ此等ハ百世ノ明鑑ヲ待ヘシ
訓美ニ雅ハ正ナリ直ナリ多ニハ正言ト訓スレト和歌
ニ直言歌ト訓スレト平話ノ徒言ニ分レ又レシ
俳諧ハ吾訓ノ響音ヲ憚レシ○今按スルニ凡雅ノ三躰
ハ漢書ニ詩經ノ所成ニシテ凡ハ虚ヲ以テ天ニ起リ雅
ハ實ヲ以テ地ニ止レ詩經ハ此ニ美ニ濫觴テ乾坤ノ
二美合ト成レリ故ニ我家ニハ凡雅ヲ虚實ノ二用

頌

ト見テ以ニ懲惡ノ虚ヲ用イテ雅ニ勸善ノ實ヲ用
シ六雅ニ正直ノ意ヲ汲テ大ホテ公言氏訓スヤ也等
ハ異名同躰ノ例ニテ一世ノ衆議ニ據ヘテ
訓美ニ頌ハ称ナリ義ナリ爰ニ祝言ト訓スレ和歌
ニモ祝言ト訓シテ引歌モ節ル所ナシ然レ詩序
ニ雅頌ニ躰ノ様ト推ニ国家ノ諷諫ヲ令口ニ
頌ニ君父ノ壽量ヲ祝シテ神ニ告ル意ハ勿論ニヤ
此故ニ六美ノ引歌モ頌ノ躰ノ明ニテ且外五名
ハ節ハレ○今按スルニ毛詩ニモ雅頌篇朝廷郊廟
樂歌之詞其詔和而莊其美實而密正

賦

之於雅以大ニ其規和テ之於頌以要其止也
詩之大本也然レ六雅頌ノ二用ヌル外ニ莊密
次々ヲ備ヘテ諷諫ノ正直ヲ行ヘリ内ニ和實ノ情
ヲ含ミテ詩序ノ優美ヲ調ヘシ爰ヲ孔子ノ曰
給ル文王ノ文ニシテ孔子多我家ノ太祖ト感荒自馬ノ
和節モ此謂ナリ之經ハ例ノ温厲ヲ知ヘキナリ
訓美ニ賦ハ鋪ナリ景ナリ爰ニ六美言ト訓スレ和歌
ニモ美歌トアリ又選ノ季子註ニモ象事明白也
ト云ハ眼前ノ物ヲ美並テ直地ニ安情ヲ演シ
謂ナリ定哀郊ノ叙文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリトハ

四季三月雪ノ姿相ヲ詠シ花鳥ノ優游ヲ知レト
ナリ賦ハ殊ニ文章ノ物惣名ナリ

比

訓美ニ比ハ比喻ナリ又ニ准^{ナラス}言ト訓スヘシ和歌ニモ
準歌トアリ^{ナラス}優托物比與トハ詩人歌人ノ優情
ヲ梅^{ナラス}テ鳥ニモ木ニモ物ヲ言ス類ナリ或ハ韵書ニ
比テ子ヲ鳥^{ナラス}ニ比^{ナラス}カ於物^{ナラス}ニ與^{ナラス}托^{ナラス}事^{ナラス}於物^{ナラス}ニ
云ヘリ○今按スルニト與トハ姿情ニ先後ノ心得アリ
比ハ物ヲ取テ且ハ姿ニ准テ與ハ物ニ托テ其情ヲ起ス
物ヲ催スト物ニ催スト自他ノ差別ヲ知ナリ也其等ヲ
他語ノ微中^{ナラス}ニ解^{ナラス}筋^{ナラス}ニ云キナリ

興

訓美ニ與ハ誘引^{ナラス}美ナリ又ニ誘^{ナラス}言ト訓セシ和歌
ニ喻^{ナラス}字ト訓レスト凡比ノニ訓^{ナラス}筋^{ナラス}ハ然レハ與字
ト凡字ノ和訓ハ美中ノ太^{ナラス}騷^{ナラス}ニテ我内ノ象^{ナラス}議ハ
知是^{ナラス}トト百世ノ明^{ナラス}監^{ナラス}ヲ恐^{ナラス}キナリ○今按スルニ與ハ
一美ハ和^{ナラス}優^{ナラス}トモニ人^{ナラス}明^{ナラス}ナラヌヤ去^{ナラス}ハ論^{ナラス}語^{ナラス}ノ陽^{ナラス}仁^{ナラス}見^{ナラス}篇
ニ子路^{ナラス}ニ詩^{ナラス}經^{ナラス}ノ風^{ナラス}流^{ナラス}ヲ勸^{ナラス}テ詩^{ナラス}以^{ナラス}可^{ナラス}興^{ナラス}トハ四季
ノ月^{ナラス}雪^{ナラス}花^{ナラス}鳥^{ナラス}ニ誘^{ナラス}テ優^{ナラス}游^{ナラス}ノ情^{ナラス}ヲ與^{ナラス}セトノ
謂^{ナラス}ナリ然^{ナラス}レ^{ナラス}例^{ナラス}ノ朱^{ナラス}註^{ナラス}ニ發^{ナラス}起^{ナラス}志^{ナラス}氣^{ナラス}トノ
云捨^{ナラス}レハ孔子ノ宣^{ナラス}給^{ナラス}フ似^{ナラス}而^{ナラス}非^{ナラス}ト物^{ナラス}ニ興^{ナラス}ハ
決^{ナラス}レテ遊^{ナラス}與^{ナラス}ノ與^{ナラス}ト註^{ナラス}スレシ詩^{ナラス}者^{ナラス}人^{ナラス}心^{ナラス}之^{ナラス}感^{ナラス}

いかに新古のきつらとをい——きつら

^{ニ子切} 君火を上げ。ふまへおんど。君火を上げ
^{ニ子切} 子こしらふ。まをたかまひぬ。血むら。

これら自家の御文をう——子切にふの用おれら
ら子切の用ありしをれと各自の不用らむ
ゆて古おの御言と押字抄字の御言をきれら
切字の御言とあはらう——

東老云中を此施おくらむらうといはの能およ
し子切の御言とあはらうと押字抄字
おとつりきとていふ論ありとる也△再撰とる

け二切とて子切と敵對しとらうとて
とらうとていふとけ切の御言とていふ
ある事此をいふら月の御言とていふ
困極東とていふとていふとていふ
けありとていふとていふとていふ
哉とていふとていふとていふとていふ
とらうとていふとていふとていふとていふ
敵對の御言とていふとていふとていふ
と子切の御言とていふとていふとていふ
御言とていふとていふとていふとていふ

と書は弱とて此もや若らむし保名物の名お
とてせらるるやけ格となし新制なれぬ
例のまじりまじり或は給の類とすけり給ふ
伊勢とあふそと方らるるねとたれと
常られそと常られし神とそとと敵討
これと再撰の神句なれぬとす
或は連音と神語とに能くしるあり
両家の神句の書なれしと論とれぬ
るおまじり。今梅まらぬ連音とて
句とあひし神語もまじりぬとてしる
能くしる

神書の神句とあひしをのちに解名をのしき
いさくは月雨と神書の神句ありや切字は
入石あまの句ありしをのちに能くしる
例のこふおちりし

月よまらるる。あはれし。神歌。
梅の葉。はらりとのちをたけけ。

前章と武江の事浪士の鑑念の歌ありはれ
けの神書なるおを同ふと詠物とすけり
よふと心とぬくさくららるる
後章と武江の事浪士の鑑念の歌ありはれ

歌見互に見
ハ文法句
ヲモテテ見合
セルナ

歌見互に見
ハ文法句
ヲモテテ見合
セルナ

不用... 東老... 後... 証... 所... 所... 所... 所... 所...

遺福
 下書
 一不

徳... 徳... 徳... 徳... 徳... 徳... 徳... 徳... 徳...

楊朱... 見... 義...

一夫定ヲ
六千大虚
イハレト云
故事云々

利ハ
群利也
新ハ
カリモリ
スルー

いふに於て千大の業を修めりより字なるべきは
しほとふとあげよといはく我を我とんゆし
はくんとしや今とて再撰の場へのてあを
一語の新断とありの哉字よふとふのなとを
耶字よふとふのなとを捨てしよか月むの設と
もあゆむね多ふなといとけしむしとふ祇の
ハナ新といひ紹巴の五百ヶ條とつるし仰ゆれ
百千一億よの御まを一宗くよとてはさるまを
各ぬよゆとつまこととて彼子自集の談笑訓
よあり所の夜話あれいあをれてし例めあら

け或月の増減あんらとをさるえの撰詞
し一言一と昔の御命ちりよふとる名の御言とし
るまらんやとを遺稿の大任しと用撰の
例の家法よよりくまを

桐の字も。新断あり塀の
おま
神めむよむしとまのま行むの向

まれの新の一書と田花の御家とふむあり
まのこいふとる家の富貴とといかりとる様
ありと我しとるなりしと向とゆくと桐のま
こいふとれしとらと桐のまむなるなりん

桐トウも鶴ツルもあつて田家と稱する存りた
 鶴ツルありし句と切りて塙ノノの田と隔ヒつても
 あつて況や鶴ツルららるとも句に上ノ古歌の撰入
 らるとやふかあつて此傳と稱する遠く
 田家のまじりてあつてとて桐トウのまじりて
 とあつてとあつてとあつてとあつてとあつて
 の難ナきなりと存りてあつてとあつてとあつて
 物モノらねと此論あれは句と極キのまじりて
 としりてと所用の語あつてやとと鶴ツルと稱
 して桐トウを句作の用とあつてと極キの極

中ナカの官家と稱はの漢カンあつて桐トウと田家の
 富トモもちり物モノやまゝとあつてとあつてとあつて
 時トキの命ノチとあつてとあつてとあつてとあつて
 暖ノグ殿ノの層ソウ柿シ念ネンの懐ハツ田タありとあつてとあつて
 去ク来キと武ブ門モンの功コウとあつてとあつてとあつて
 稱ナとあつてとあつてとあつてとあつてとあつて
 少コのまじりてとあつてとあつてとあつてとあつて
 今イマ世セ不フ常ジョウの律リツとあつてとあつてとあつて
 られは押オシ理リの向ムカとあつてとあつてとあつて
 られはむとあつてとあつてとあつてとあつて

とにんごころを△再撰よりんけけと和歌の
我あしあくお。のいしきく或とらひせり。その
いしきくおとせまうくと通例あれ。今廿二季
いふおのい切りい切りもいふとけけとけけ
抱字より軒回のい集とあるまもせとわす
の曲のいやふとせまうけけの地とふい
初をのまるといしきく一集あたまわい
どのまると例と通例のまうとあれい
い今世もまうとけけとけけとわす
或と右の各目は大廻といふとけけとけけ

こ常
分ニ
ルハ

とあつものにふるあつとつれの初句とらわに
云々の各にる書りり我家の或目とらわに
これい霞霞の用捨あらん。○字梅もるに
初字とらわと極む。一は格とらわの各目
いありいしあつとつとあれい和歌いし
の名ありい達エテ云解とい極む。一は格とらわ
此あれい面白解とい極む。一は格とらわ
一極むといふ名の次ありつれの和歌いし
あつとつれの能造とい面白とらわと格の
今いあつといま今い貴物の面白とらわと

ちるに等しく包く托差ふあるはけなる和歌七新
 ころし有^二一^一部^一解し見様解し以下のおる各あり
 とも包ありとあ^二ん^一と仰きられたるはやま^二
 大廻し玄妙しち切の押取あんと東と各句は
 句強らりとも^二あ^一の各付しんとちく^二と^一と物取各
 大まう^二さ^一しり^二或^一と申ふ所着せ白^二の^一入
 不あらねし各句を起し各句あ^二ん^一の申各坊
 一各句と^二ら^一りてあ^二ら^一と^二き^一あ^二し^一よ^二ま^一
 ともしく^二け^一え各と在おの神句とあ^二ら^一も和歌の
 各句と^二あ^一し^二能^一活の事話の用あ^二ら^一たは

ら切のり^二の^一ありて^二あ^一りて^二あ^一れ^二の^一人^二に^一實^二や^一あ^二ら^一む
 け^二れ^一し^二我^一の^二家^一の^二と^一御^二あ^一し^二と^一古^二の^一或^二句^一あり
 ぬれ^二き^一れ^二他^一の^二對^一して^二論^一と^二く^一も^二他^一ら^二む
 万^二能^一し^二万^一能^二い^一る^二の^一ま^二じ^一り^二あ^一ら^二言^一不^二到^一の
 各あ^二ん^一と^二あ^一ら^二の^一御^二句^一と^二あ^一ら^二せ

東^二花^一と^二世^一後^二と^一村^二と^一曉^二漢^一と^二一^一例^二の^一あ^二ら^一む^二り^一に
 路^二あ^一し^二ら^一む^二き^一れ^二し^一一^二路^一の^二結^一語^二と^一後^二の^一
 御^二句^一と^二あ^一ら^二し^一一^二と^一と^二あ^一ら^二ち^一り^二と^一對^二
 一^二御^一句^二と^一あ^二ら^一し^二ら^一む^二あ^一ら^二し^一例^二の^一あ^二ら^一む^二
 孫^二言^一ち^二ら^一り^二と^一御^二の^一ま^二ら^一む^二と^一い^二ら^一む

六朝人
不墮ハ
唐ナリ
西施ハ
女也

古抄の石目とあしきしとや取つ減ね抄集
の山巖うやととちちるもとたあましはあ
仰命のまへにあましく武居の道徳よき取
て今世の句とあけさんまきましく不墮ふたと拾し
かきし西施さいしの客色やくしきとあまらあるる再撰
の石北産きたん抹ましてあまの首句に罪あま
さんらへして家諺と家言ふまきをせ

大廻
幸時の松とせしり勝ん。
りままとあまみんしおまらる。

まわし三幸の例の湖南北貴道徳よあつて幸時

の三幸と我々の秘教はまわして白鳥の丸好傑は
も昔の地の子孫とあましく秘言のふいはな句
の勝かちとてしつ詞と勝かちかして法をたれいな
し確証の類ありあましくむらり松の勝かち
面白からふしとあましく下所のゆゑあま
まると大まうしつしあましくあましくあましく
のらほあり次よりまの三幸しあましくあましく
偶作ぐさくしつしつ詞のふとあましくあましく
と法をたれいなあましくあましくあましく
あましくあましくあましくあましくあましく

ナシ
鎖詞
ナサリノコトハ
ソチキニナル
詞ナラン

常山ト云
山アルナリ
地ノミダラキ
所
ヌキサシ
ナラマフ

あつてせいの句がせと味とさるるを色してにけり
後よりあつてをさるるを色して鎖詞の比を
連言此艶詞とあつてさるるを色して他借の
曲意とさるるを色して格と常地の比
を色してさるるを色して善通のふとあつてさるるを色して
業の比とさるるを色して白馬の文章訓と
常地の比とさるるを色して良選は所の歌と後
の比とさるるを色して詠れり
秋の文をさるるを色して今も起借と結語と常山
の地を詠ありて詠り尾と詠とさるるを色して尾

ひよふとさるるを色して此と文章のいあつてさるるを色して
とさるるを色して此と文章のいあつてさるるを色して
他借と十七子の終よりあつてさるるを色して
和音此後此とあつてさるるを色して
のあつてさるるを色してあつてさるるを色して
あつてさるるを色してあつてさるるを色して
いよ言語不到の各目あつてあつて二語の捨
へ探象の喩とあつてさるるを色してあつてさるるを色して
まろしやとさるるを色してあつてさるるを色して
あつてさるるを色してあつてさるるを色して

古今抄巻三

三十九

朗詠
カハリソシモリ
ノナキニ
何

おのよれけりてきりと誤りたにんゆふにふりあ
てん屋一りの中座とらひ下座とを此大海りせ
まねてしやうきとらふ節の簡し切てきりて
まを或は月とあはれ梅とあはれ或は又日此春句
もよゆも或は秋日の春句もよゆもよゆも
まは秋の朗詠とつてしはてし合の事句
あはれ向かへと詠嘆の余情と細くしと春句
ねえ春句あはれとらねえとらねえとらねえとら
ゆもよゆもよゆもよゆもよゆもよゆもよゆも
人のゆもよゆもよゆもよゆもよゆもよゆもよゆも

この神ゆのゆはくしとらねえとらねえとらねえ
二をを信して古た各同と扱と申解き解
の詞と共しゆきあめ月とあはれとらねえとら
知新とつては春句のちとらねえとらねえとら
一所のまき春句と古た今よはて式の各とまはりて式
のゆもよゆもよゆもよゆもよゆもよゆもよゆも



貞享式りて一終

